

5

縄文時代の暮らし

■人びとの住まい

縄文時代の人びとが暮らした住居は、地面を水平に掘り下げて床面とする竪穴式住居が一般的であった。長沢遺跡でも、これまでの発掘調査で合計四一軒の竪穴式住居跡がみつかっている。これらの住居跡には、柱を立てた穴（柱穴^{ちゆうけつ}）や石で四辺または三辺を囲んだ炉（石囲い炉^{いしがこ}）、土器を地面に埋めて火

を焚いた炉（埋甕炉^{まいようろ}）の跡などが残っており、またその内外からは、たくさん土器や石器が出土している。住居内で、炉は聖なる空間であり、そこを中心にして家族の座る場所や作業の場が決まっていたと考えられている。

またこの時期の特徴的な遺構として、集石土坑がある。直径一メートルほどの穴に焼けた石が敷き詰められていることから、焼いて温めた石を使って、食糧を蒸し焼きにした調理施設の跡と考えられている。長沢遺跡でも、多くの集石土坑がみつかっている。

■長沢遺跡の土器

この遺跡から出土する遺物は、煮炊き用に使われたと思われる深い鉢形の土器がもつとも多い。土器は食糧を煮炊きし、貯える二つの機能をもつため、それを使うことよって食べられる食物の幅が広がり、食生活が安定していった。このことは、人びとの生活を格段に向上させた



復元された縄文時代の住居（多摩ニュータウン遺跡） 縄文時代のひとびとは、地面を掘り下げてつくった草屋根の住居に5～10人くらいで住んだと考えられている。



炉体土器(加曾利E式・1次調査出土)



浅鉢形土器(勝坂式・1次調査出土)



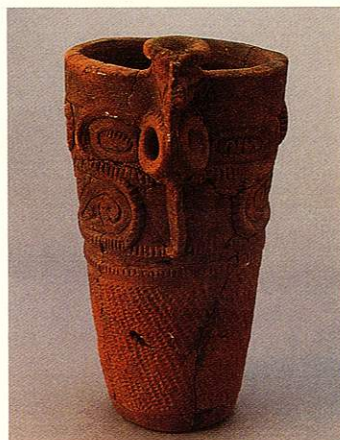
深鉢形土器(勝坂式・8次調査出土)



深鉢形土器(勝坂式・8次調査出土)



深鉢形土器(勝坂式・8次調査出土)



深鉢形土器(勝坂式・8次調査出土)

いえよう。時代が下り社会が発展していくと、生活に応じたいろいろな形の土器が生みだされ、日常的に使うものや特別なときに使うものといったように、使用方法の区別もできてきた。これに対して、浅い鉢形の土器の出土量は、深鉢形にくらべて少なく、そしてやや大きなものが多

■石器のつくり

い。土器の内側に朱が塗られたものがあることから、このような土器は日ごろ使われる生活用具ではなく、祭りやまじないといった行事の際に使われたものと考えられている。

土器と同様、石器もたくさんの種類が出土している。土を掘るために石を打ち欠いてつくった打製石斧や、木を削ったり加工したりするために、石を磨いてつくった磨製石斧、木の実などを製粉する



深鉢形土器(勝坂式・2次調査出土)



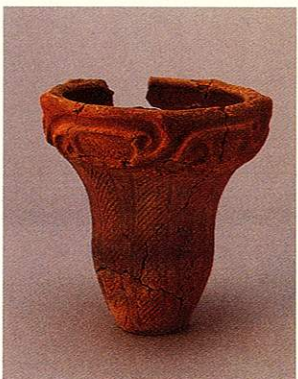
深鉢形土器(加曾利E式・1次調査出土)



深鉢形土器(加曾利E式・9次調査出土)



深鉢形土器(加曾利E式・9次調査出土)



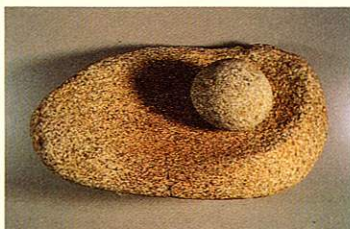
深鉢形土器(加曾利E式・9次調査出土)



深鉢形土器(加曾利E式・9次調査出土)



長沢遺跡出土の打製石斧



石皿と磨石



長沢遺跡出土の磨製石斧



長沢遺跡出土の石匙

石皿いしひらと磨石すりいし、ナイフの用途を持つつまみのついた石匙いしけじ、黒曜石やチャートといった固い石材を加工してつくった石鏃(やじり)などがある。人びとは自然の材料で、食糧を獲得したり調理するための、生活に必要なさまざまな道具をつくり出していただのである。

■自然と一体となった生活

長沢遺跡でみられる出土品は、土器は深鉢形土器、石器は打製石斧を中心としている。ここに住んだ人びとは、狩猟と採集を基本とした生活を送っていたが、狩猟用の道具である石鏃(やじり)の出土量が少なく、打製石斧や製粉用の道具である石皿や磨石の出土が多いところから、日常の食生活を支えたのは、木の実や植物の根などの植物性の食糧であったのであろう。福生市の近くにある羽村市精進バケ遺跡からは、シカやイノシシの類と思われる獣の焼けた骨がみついている。弓矢を使い、落とし穴を掘ったりして、獣をつかまえたりもしたのであろうが、動物を人びとの主食として足りる量を確保するのは、むずかしかったと考えられている。

こうした傾向は、このころの多摩川中流域の遺跡全般に共通してみられるものである。豊かな自然環境の武蔵野台地で、人びとは獣を追い、木の実などを採集することによって、自然と一体となり、季節の変化や自然のリズムに合わせた生活を送っていたことであらう。